おふでさきの世界を歩く

第4回

山澤昭造【やまざわ しょうぞう】
本部准員
天理教校本科研究課程主任

一号9―20「おつとめ」による「たすけ」

だん〳〵と心いさんてくるならバ
せかいよのなかところはんじよ　（一 9）
このさきハかくらづとめのてをつけて
みんなそろふてつとめまつなり　（一 10）
みなそろてはやくつとめをするならバ
そばがいさめバ神もいさむる　（一 11）
いちれつに神の心がいづむなら
もの、りうけかみないつむなり　（一 12）

りうけいのいつむ心ハきのとくや
いづまんよふとはやくいさめよ　（一 13）
りうけいがいさみでるよとをもうなら
かぐらつとめやてをとりをせよ　（一 14）
このたびハはやくてをどりはじめかけ
これがあいずのふしきなるそや　（一 15）
このあいずふしぎとゆうてみへてない
そのひきたれバたしかハかるぞ　（一 16）
そのひきてなにかハかりがついたなら
いかなものてもみながかんしん　（一 17）
みへてからといてかゝるハせかいなみ

みへんさきからといてをくそや　（一　18）
このさきハ上たる心たん〳〵と
心しづめてハぶくなるよふ　（一　19）
このハほくむつかしよふにあるけれと
だん〳〵神がしゆこするなり　（一　20）

【解説】

今日、公刊されている『おふでさき』は一ページに四首八行となっていますが、教祖の執筆された原本の写真版を見ると、第一号は半数以上のお歌が、上の句と下の句と二行に書かれず、書き流しとなっています。第一号が例外的な書き方になっている点に関して、中山正善（しょうぜん）・二代真柱様は、「書き様（よう）の整（ととの）はなかつた時の姿」ではないかと推察されています（※1）。

そして、7と8のお歌はひと続きに書き流されていますが、9のお歌から筆が改められていることが分かります。明治二（一八六九）年に執筆された一号1―8のお歌が、明治三年に形を整えられたうえで「よろづよ八首」として、十二下りの前に加えられたことを考えても、ここに区切りを設けることができるのではないでしょうか。

〈人間の心が勇む先に〉

1―8のお歌では、親神様の望まれる「たすけ」は人間の心が勇むなかに実現され、親神様は人間の心を勇ませにかかっているのだと言われていました。

そのことを踏まえたうえでの9のお歌です。人間の心が勇んだ先にどのような世界がもたらされるのかが示されています。

まず言葉の意味を確認すると、「だん〳〵」は、「だんだんと順序を追って」というように過程を重視した表現になります。「よのなか」とは、大和（やまと）地方の方言「よんなか」のことで、豊年満作、豊作の喜びを意味します。「ところ」は、ここでは村や町などの社会を指します。

つまり、「だんだんと順序を追って、しだいに世界中の人々の心が勇んでくるならば、世界中が豊作となり、社会が豊かに繁栄するという喜びの姿を見せてやろう」と教えられるのです。人間の心が勇むことに呼応して、親神様もまた心勇まれ、豊かな世界を守護してやろうと言われているのです。

⇐「おふでさきの世界を歩く」のバックナンバーへ

このお歌をより具体的に理解するために、ここでは心勇組の初代講元である山田伊八郎氏が書き取った「教祖様御言葉」の中にある、次のようなお言葉を参照したいと思います。

明治十八年四月十九日（旧３・５）「神様御話」

（略）

早々と、なにのたすけも皆つとめ。

一番さいしよふに、こいのさづけ。此こいハ、はい三合に土三合にぬか三合。此三、三、九合一駄トシテ、是に本づとめをかけて　此こへに水お入て、※ハらのすべにて田地へうち、夫レヨリ　はいでのつとめ。虫払のつとめ、雨がふらねバ雨こひつとめ。雨がふりすげバ、雨あづけのつとめ。又夫レヨリみのりのつとめ。

此つとめにかけてつくりたら、一反ニ付、米六石迄つくりとらせ被下。是を内からためしにかゝりたら、六石迄の豊作ヲとらせくださるゝ。

そふしたならバ村方ハ、さいしよふに、でてくる。再度くる者ハ申スニあらす。此たすけにかゝりたら、世界中、程なくひろまるで。

又、世界中の百姓をさいしよふにたすけたら、世界ゆたかになる。人間も皆一れつ、よふきになる程に。

（道友社編『先人の遺した教話（三）根のある花・山田伊八郎』昭和57年、48―49ページ）

※ハらのすべ＝藁（わら）の穂先だけを抜き取ったもの

「肥のつとめ」など「よろづのつとめ」を勤めることで、豊作を守護すると言われています（※2）。そして、「おぢば」から豊作が広がり、世界中が豊かに、陽気になっていく様子が描かれています。「おつとめ」によって、そうした姿をもたらそうとされていることが分かります。

このお言葉を重ね合わせて読ませていただくと、9は、「だんだんと順序を追って、世界中の人々の心が澄んで勇んでくるならば、おつとめによって、世界中は豊作となり、社会も繁栄するように親神は勇んで守護してやろう」、このように述べられているのではないでしょうか。（次ページコラム）

10からは、「おつとめ」を主題として話が展開されています。

〈この先は「かぐらづとめ」の手をつける〉

「この先はかぐらづとめの手をつける」（10）とあり

豊作と正直な心

農作物の収穫量と人間の心の関係について、昭和11年に開催された第六回教義講習会の中で、高井猶吉が教祖に聞かせていただいた話として次のように伝えている。

（略）神さんは、昔の通りに守護してやり度い。と、仰有る。

昔は一段について、米は四石どり、綿は二百どり、ときまってあつた。最もボロや粉米は勘定の中には入らん。不作豊年なしに、毎年きまつたる。其の外雨は月に六さい、五日は風ときまつたる。大風で家こけた、水で家流れた。そんな事昔一つも無かつた。何となら人間が正直やつたからや。

（略）阿呆は神の望みや、賢うても、正直なのは好きや、悪賢いのは嫌ひや、賢こても正直やなけにや神さんのお受取り無い。昔は皆人間が正直やつたから、いつも豊作見せて下さつたのや。

（略）

神さんは、人間の心が、ちやんと澄んだら昔通りに油も五斗とれる様にしてやらう。人間の心改めさして、昔にかへしてやらうと仰有る。しかし親神様は人間の悪い事を改めやうと云ふ様な小さい思召で天降りしたのやない。全世界を陽気にしたいと云ふ大きな思召や。ね、其処だすからして、神さんは、自然の元へかへす、正直な人間にさし度いと仰有る。（高井猶吉「教祖様から聞かせて頂いたお話の一端」『第六回教義講習会講義録』道友社、昭和11年、33―34ページ）

人間の心を改めて、昔のように澄んだ、正直な心になったら、いつも豊作にしてやろう、世界を陽気にしてやりたいと述べられている。

ます。「かぐらづとめ」については、慶応三（一八六七）年に作られた十二下りの中で、

いつもかぐらやてをどりや
すゑではめづらしたすけする　（六下り目　5）

いずれは、いつも「かぐらづとめや」「てをどりや」というようになり、さらに先の将来、これによって「珍しいたすけ」をすると、このように述べられていました。

ただし、以前に指摘したように（第2回参照）、明治二年正月の時点で「かぐらづとめ」はまだ教えられていません。「おふでさき」第一号のお歌がしるされた当時、お屋敷は十二下りの手振りが付けられ、稽古されている最中でした。ですから、当時の信者にしてみれば、「かぐらづとめ」という言葉自体は、教祖から聞いてすでに知っていたかもしれませんが、それが具体的にどのようなものであるかは、まだ想像もつかなかったのではないでしょうか。

そのなかで、教祖は、この先の将来「かぐらづとめ」という「おつとめ」を教えていく。「つとめ人衆」がみなそろって（10の「みんな」は「つとめ人衆」を指します）、お屋敷で「つとめ」ができる日

を親神は心待ちにしていると述べられたのです。

〈おつとめの意義〉

その「おつとめ」に関して、「おつとめ」を勤めるとどうなるのか。「おつとめ」をなぜ勤めるのか、ということを、11のお歌からは読み取ることができます。

お歌の意味は、「〝つとめ人衆〟がみなそろって、早く〝かぐらづとめ〟を勤めるようになったら、〝そば〟の人たちの心が勇んでくる。そして、その勇んだ〝おつとめ〟によって、親神様もまた心勇まれるのである」となります。

「そば」とは、教祖のおそばにいる人々を指します。「つとめ人衆」がそろって、「おつとめ」を勤めたら、「そば」の人の心が勇むとはどういうことか。これは、お屋敷で共に「おつとめ」を勤めるおそばの人たちの心も勇んでくる、つまり、「おつとめ」を勤めることで、お屋敷の皆の心が勇んでくるということを言われているのではないでしょうか。

ここで大切なことは、「おつとめ」をすることで人の心は勇んでくると言われている点です。

「おつとめ」は、地歌も、節付けも、手振りも鳴物も、すべて親神様がおつくりくだされたものです。をやの思いの込められたお歌を、心を込めて、歌い踊るなかに、心がたすけられてゆく。私たちお道の信仰者は、たとえ心が沈んでいるときでも、「おつとめ」を勤めるなかに、「さあやらせてもらおう」という晴れ晴れとした気持ちが心の底から湧き上がってきます。「おつとめ」を勤めることで、心が陽気に勇んでくるのです。

それと、もう一つ注目したい点は、人間が勇んで「おつとめ」を勤める姿をご覧になって、親神様もまたお勇みくださるということです。

「おつとめ」を勤めることで、親神様はお喜びくだされ、お勇みくださります。「おつとめ」を勤めるとなぜたすかるのか、それは、親神様がお勇みくださり、お働きくださるからです。親神様にお勇みいただく、ここに「おつとめ」の根本の意義があるのではないでしょうか。

〈「つとめ」によって立毛を豊作に〉

人間が陽気に勇んで「おつとめ」を勤めることに

よって、親神様はお勇みになり、不思議、珍しいご守護を現してくださいます。

12から14では、ご守護の一例として「りうけ」（「立毛」と書いて、農作物を意味します）の豊作ということが取り上げられています。

親神様の心がいずんでしまったら、農作物がみな不足になってしまう（12）、早く親神様の心を勇むようにせよ（13）と言われたうえで、「かぐらづとめ」や「てをどり」を勤め、親神様を勇めるようにせよと示されています。

「かぐらづとめ」や「てをどり」を勤めることで、親神様はお勇みくださり、農作物が元気に育つように守護してやろうとおっしゃっているのです。

〈このたびは「てをどり」を始めかけよ〉

14で「かぐらづとめ」や「てをどり」をせよとおっしゃいましたが、15では、「このたび」（いま）はいま稽古中の「てをどり」（十二下り）から始めかけるようにと言われています。

「つとめはかぐらを主としててをどりに及ぶ」（『稿本天理教教祖伝』70ページ）というように、「かぐら」のほうが理は重いとされますが、教祖は「かぐら」に先立って、まず「てをどり」から教えられたのです。

そして、「てをどり」を始めかけたら、これが合図となって不思議なことが起こってくると言われるのです。

十二下りの「てをどり」を心定めするなかに、神様の不思議なお働きをお見せいただいた経験をお持ちの方はいらっしゃるかと思います。「てをどり」をするなかに、不思議が見えてくるということを教えられているのではないでしょうか。

16から18では、ただし、不思議が現れてくる合図であるといっても、それはすぐに現れてくるものではない。いまの段階ではまだ分からないものかもしれない。しかし、いずれ、旬がきたら、必ず現れてきて、どんな人であっても皆が感心するようになる。神は何も見えてこないうちから説いておくのである、と。とにかくいまは「てをどり」をしっかりと稽古して、勤めるようにと促されています。

〈「つとめ」によって上の和睦をも守護する〉

15から18で、現在の話として「てをどり」をしっ

かりと勤めるように促されました。

それに対して、19では、「このさきハ」というように場面が切り替わって、先の将来の話をされています。

「上（かみ）」とありますが、「お上」といえば政府や役人を指します。「おふでさき」において、「上」は、「神」と対比して用いられ、現実のこの世界を指導している立場にある上に立つ人々を指します。

「ハぶく」は「わぼく」と読んで、和睦のこと。和解や和合、仲直りを意味します。

19、20では、「上に立って指導している者たちの心が、だんだんと心を静めて互いに和解する心になるよう親神がだんだんと守護していく」と言われています。

このお歌が詠（よ）まれた当時、日本国内は、明治政府が樹立したばかりで、新政府と旧幕府の間で内戦が起こるなど、世相は混乱していました。そのような「上」の人々同士の人間思案による心の擦れ合いによって戦争が起きている状況を思い浮かべていただきながら、これらのお歌を読んでいただきたいと思います。

それでは、どのようにして「上の和睦」をもたらし、戦争の問題を守護していくのか。これらの問題についても、いずれ将来、「おつとめ」によって守護していくと教えられるのです。明治十年ごろに執筆されたと考えられる第十三号では、

月日よりしんぢつをもう高山の
たゝかいさいかをさめたるなら　（十三　50）
このもよふどふしたならばをさまろふ
よふきづとめにでたる事なら　（十三　51）

というように、戦争の問題についても「おつとめ」によって守護していこうとされていることが分かります。

一号14では「つとめ」の守護の一例として、「立毛の豊作」が述べられていました。19、20には、「つとめ」という言葉こそ出てきていませんが、「つとめ」による守護の一例として「上の和睦」が挙げられているのです（※3）。

当時の信者の人々にとって、「つとめ」によってもたらされるこのような守護は、理解の範疇（はんちゅう）を超えていたかもしれません。

しかし、そのなかを、

おふでさきの世界を歩く

ようこそつとめについてきた
これがたすけのもとだてや　（六下り目　4）

というお言葉を胸に、勇んで「てをどり」の稽古に励まれたのではないでしょうか。

一号1―8では、親神様のお話を伝えていくことによって、人間の心を勇ませていくとありました。それに対して、一号9―20では、「つとめ」によって、人間の生存環境をより良いものにしていこうと言われているのです（※4）。前者は、世界への布教伝道に当たり、後者は「うち」での「つとめ」に当たります。これから、この二つの事柄をめぐって、「おふでさき」のお話は展開していきます。

※1　中山正善『続ひとことはなし』道友社、昭和26年、45―46ページ参照。

※2　このような「肥のさづけ」から「豊作」にいたる流れは、「みかぐらうた」一下り目にもみられる。

※3　「つとめ」による守護については、『天理教教典』「第二章　たすけ一条の道」にまとめられている。

なお、ここで述べられた事柄は、「みかぐらうた」において「とりめがさだまりた」（一下り目10）、「ところのをさまりや」（二下り目　10）と表現されている。

※4　芹澤茂『おふでさき通訳』22―23ページ参照。